

めっちゃや普通のことなんですけど、全く恐れんでき

いと思います

語り手 西村慧(高校五期生・早苗会会長 市議会議員)

聞き手 細岡大起

*

文化祭について

―まず、最初に高校生活のお話、聞かせていただけませんか。特に文化祭のお話が聞きたくて。

なんかね、とりあえず僕の代が。えっと、細岡くんは高入生(高校からの入学)？

―いや、中入生(中学からの入学)で。

あ、中入。僕高入なんですけど。僕の代で初めて高入生と中入生が一緒になったんですよ。

なんかそれまでほんまにあすなろ祭みたいなのは、ほぼほぼ形作られてなかった記憶やね、入った頃は。一年生の時は何にもなくて、とりあえず文化祭実行委員の人みたいなんで集められて、で、ホームルームで二人ぐらい実行委員に入って。なんやったつけ、一年生の時はね。何したんやろうな。

―ああ、もうその程度。

ああ、合唱コンクール。

―えつ、高校ですか？ なくなりましたよ。

あら。僕らの代は僕らの年ぐらいから、(あすなろ祭で)一年生が合唱コンクールで、二年生はちよつと曖昧。教室展示。三年生は市民ホール

演劇です。みたいな。そんな感じに分かれてた。別れつつあった記憶があつて。

―二〇一〇年ですよな。

どうやったかな。

その時は、一般来場者とかも呼ばずに、そう、僕らの一年生の時は、なんかもう、歌の練習だけしといてね。で、実行委員だけ周りで装飾しといてね、みたいな。

―はいはい、はいはい。

なんか全然、歴史も新しいし、全然面白くないと思ってて、二年生の時にちよつど文化祭の副実行委員長をしたんな。で、その時に、副実行委員長、今の生徒会の執行部とまた別の組織やってね、実行委員会は。

―あ、そうなんですか。

ほぼほぼ別の組織やったんで、はい、じゃあ副実行委員長します言うて、そこから、一般来場者、募集しようか、みたいな。

―へえ、そうなんですな！

で、A先生っていう文化祭に熱い思いを持った先生がいはって、もういらつしやらないか。であとB先生。多分いないか。うん、A先生とB先生っていう、まあまあ年配の先生が、「ちよつとせつかくやし一万人目指すか。」

みたいなことを言い出しはったんが始まりで、じゃあやりましょうかって。

―すごいですね。

そう、結局一万人越えへんかったと思うねんけど。そんな時から三年生は市民ホール、二年生は教室演劇、一年生は合唱やったかな。

教室展示かどうか忘れたけど、なんかこの三学年ごとに別々のことしましうかつて言つて始まつた。だからゼロから作つた感じの代やつたから、めっちゃ面白かつたなとかね。

―(西村さんの代のパンフレットのみ保存されておらず持つて来れていない)本当に申し訳ないです。あ、一三。二〇一三年ですね。(持つてきたパンフを指差す)

だから、これ一個下やんね。

―そうですね。

そう、多分ことほとんど一緒やと思うな。

―じゃあ、本当にそう變つてないんですね。基礎的な部分は西村さんが作つて。

ああ、でも中学あんま記憶にないな。高校二年生が教室劇で、三年生が市民で。

一年生、なんかシネマとかしてたんやね。これは知らんかつたな。

―その高一、高二の教室劇つて、一昨年まで變つてなくて。

そうなんや。

―今年で第二〇回なんで、第十八回。その年までずっとその形やつたんですよ。

そうなんやね。高校入つて、ま、いいのか悪いのか、まだ形が形作つてない文化祭だったからね。

―すごいな。年々受け継いできたのが西村さんの代のものだったんですね。

多分ね。まあまあ。それまでも歴史があつたけどね。うん。その時はね、オープンにしましうかつて言つたのが僕らぐらいだったかなつていう記憶なんで。

―ゲームチェンジャーですね。

ゲームチェンジャーだね。

―見かけは變つたようには見えても根本的なものは變つてないというか、そういうところはやつぱ西村さんから始まつたんやなつて思ひます。

そうかそうか。そうやねんな。だからほんまに何回も言うけど一年生の時はほんまになんかあれやつたな。とりあえず形作ろうよみたいな感じで。でもやつぱり、記憶によると、実行委員じゃない人らが、なんか教室の中で遊んで。ちよつと、何してんのみたいなね。やることになかつたのがね、確かにあかんかつた。指示不足でもあつたから。なんか、一人で不甲斐なさというかね。

二年生からの文化祭が、一連の企画するとかね、めちやくちやためになつたというか。実行委員会してたからね、財務担当として予算見ながら全体的に考えるつていうのは、めちやめちや、ためになつて。

―そこも西村さんの代から形作られてるんですね。

*

市議会議員と高校生活の結びつきについて

―高校の生活と今の生活で繋がつてる部分とありますか？

今、市議会議員つていう仕事をして、どつちかというところ、さっきの文化祭の例にあるように、ゼロから一を作るみたいな仕事なんで、人を喜ばせたいというか、成果を出したいみたいなことが芽生えたんですが、この文化祭がきっかけかなと思つてね。やつぱ人のために働こうと思つても、自分のモチベーションが上がらなあかんし、社会でどれだけいいと思うことしても、逆に人のためにならへんかつたらあかんで、なんかこの文化祭というきっかけを通じて、こう、自分のモチベーションと

周りからの期待をいい感じに融合させたら、皆WinWinなことができるな
っていう経験があったから。

で、市議会議員も、それぞれの主張や拘りを持っています。選挙で喋
ってても自己満足で終わってしまう人っているじゃないですか。まあ、
いるじゃないですかっていうか、いると思います。だから、例えば、最
近よく人口減少社会っていうじゃないですか。
—はいはい。

—都市部に住む政治家とかだったら、コンパクトなシティにしていき
ましようねっていう一方で、山間部に住む人は山間部に移住してほしい
ともいう。でもそれは発言してんのはいいけど、いろんな思いがあつた
りね。そこをどう折り合いをつけてみんなに理解をしてもらうかで。

文化祭の時も、こう、自分の思いもそうやけど、本質を理解してもら
って相手にやる気になってもらうのも大事やなと思った。それはちよつ
と今、生きてるかなと。マインドとして生きてる。まあ価値観は持つと
くの大事やけど、押し付けすぎたら空回りしちゃうなっていうのは。

そう、押し付けすぎたら空回りするなっていうのは、めっちゃめちゃこ
の高校三年の生活で感じたかな。

みんなが知ってることやったらね。やろうやって言ったら、あーや
るかかってなるけど、新しいの作る時にやろうや言うても、そんな時間
の無駄やし、とかね。

—まさにでも、選挙の立場ってそうですよね。選挙ってほんと難しいで
すよね。正解がわかんないって。

うん。そうやね。でも市議会議員っていうのはさ。ちよつと話ずれ
るけど。

—いや、全然全然。

二〇、三〇ぐらい陣営いるわけね。だから、一部の人に支持頂けた
ら当選するわけよね。だから、一万人いたとしたら、まあまあ極端。一
〇万人都市やったら、一〇〇分の一ぐらいの票をいただいたら、当選で
きます。

—もうそれが大事やから市議会ってありますもんね。一部の声の人を拾
う。

そう。だから、逆に言うと、自分の信じることとか、自分の拘るこ
とを中心に主張するだけで当選することもある。いい意味でも悪い意味
でも。実行委員長とかしてたら市長みたいな感じやね。その方向性を大
多数の人が賛同し、大多数の人がうんって言うてくれないとできひん
し。大多数の人をね。目を、目を向けさせるっていうのが大事。

でも、市議会議員は、高校でいったら代議員みたいなのかな。市議
会議員は、市長、学校で言う生徒会長とかのやつてることを、意味な
いんちゃうか、とか言ったりとかね。そういう感じかな。

—なるほど。他にも高校生活と具体的に市議会議員のお仕事に役立って
るのかとか、ちよつと興味あって。言える範囲で大丈夫です。文化祭に
繋がったり、文化祭か執行部に繋がったり。教えていただけません
か。大前提、市議会議員って、どういうお仕事なさってるのかも気にな
ります。

ああ、じゃあ、ちよつと喋りながら思いついたことを。市議会議員
はその、大きく二つ仕事があつて、一つは、市議会、地方議会は二元代
表制って言うて、市長が選ばれます。市長は、そのまま自分の権限にお
いて、道路作ったりとか、学校を作ったりとかします。

で、その一方で、住民のさっき言うてくれたように、少数意見とかも
いっぱいあると思うから、それが漏れへん、それがおろそかにならへん

ようにとか、市長を監視する。監視するのと、市長が見落とした政策とかを提案するっていう二つの機能があります。

だから、年に四回定例会っていうのが開かれて。その会議で議員とかから「これとかこの施策、来年からやるのどうですか」とか提案したりとか。特に一番大事なのが、三月議会の一年の予算を決める機会があった。甲賀市やったら四〇〇億円ぐらいあるんやけど、可能な限り細かく確認して、これ無駄じゃないですかとかね。だから、政策提案をするためには、市民の皆さんのところにしょっちゅう行って、まあまあ、近いところに。子育て世代の皆さんのとこ行って、なんか困ってることないですかと。例えば今年、僕が提案したの、今さ、うちから立守まで通うのにさ、電車やったら一時間半ぐらいかかるわけよね。どこに住んでんの？

—僕、神戸ですね。神戸でも一時間半かかりましたね。

甲賀市在住の高校生でもさ。少し遠くの学校いきたい生徒もいるやんか。だから学費までは出せへんけど、交通費とかさ、やつぱりちよつと補助しようとかいうことを提案したりとか、そういう提案とかを、こう、みんなの話聞きながらやってる。

*

当時の生徒会長時代を振り返って

—生徒会長の時で、公約ってあるじゃないですか。現実的なラインのね。それは民意を聞いて作ったりするから繋がってるんじゃないんですか？

ほぼ繋がってんな。(笑)

—そうなんですか！

なんか、そう、そもそもなんかその土台が作られてなかったから

ね、僕らの年は。だから、公約というよりは、なんか、全員になんかアンケートしますみたいな。アンケートとか、その、全員に調査してもらって。困ってることがあるのか的な調査。それを生徒部の先生に喋りに行ったり。そうそう、思い出しました。でね、月に一回、校長先生とかと喋る。とかも作った気がする。

生徒会執行部の会長と副会長と、昔はなんとか局長っていうのが二人いたから、六人ぐらいで校長先生とかと喋って、こういうこと困ってるんですとかって。

—まるまる今に繋がってますね。(この会議は定期的に今も続いている)成果とかは出てないけど、土台は作ったかなっていうか。

—いや、めっちゃ大事ですよ。その土台の上で僕らが今やってることですよ。

—そういう感じをやり出したからな。

—その人の声を聞いて、それを伝えたりとか、それを元に変えるっていうのが。

でもね、聞くことが大事やと思うね。市議会議員活動に生きてるマインドとしては、やつぱり聞くっていうことの大事さ。

聞いたら、なんでそういうことを言ってるかってわかるじゃないですか。意外と話聞いてみたら思ってたのと違うとか。

「それって、もしかしてこっちの問題じゃないですか？」みたいなまあ、なんかうまくいこと言えへんけど、気づきがあるよね。

校則を廃止してほしいとかみたいなんもね。全体的にというより部分的な問題とかが見えてきたりね。そういうのはちよつと、文化祭じゃなくて、生徒会とか、生徒会活動して思ったかな。なんかある？

—実際、今、校則がなくなってる。自分が思うその場に合った服装で、そ

の場にあつた行動を取るつていう。それにリスペクトを持つとか、常識を持つとかね。でもそれはそういうのを学ぶ場としての学校を作ることが目的です。

先生はなんて言つてんの。そのルールを。

—いや、先生と一緒にやつてます。

今、一旦、校則がなくなつた？

—もうなくなつてます。

すごいいね。

—市議會の話から一気に。現実離れしてますけどね。

ね、難しいよね。ほんとにね、難しいよね。

—難しいんですよ。

難しいよね。いやいや、ほんまにそうやねんな。なんかさ、議會もさ、校則じゃないけどさ、議會規則の今、副議長と言う立場で、時によつては議長に代わつてチェックする側やねんけどさ。極論ね、規則とかなくていいんだよ。で、その人が金髪で、なんかちよつと言ひ方あれやけどさ、半袖短パンで来ようが、なんかタンクトップで、議場入つて質問したつていいんやけど。

でも、それはその人が選挙で、次の四年後の選挙で、どうなるか？

みたいな。結局自分に帰つてきたら、反省しはるし、案外影響なかつたやんと思つたら、そのまま続けはるし、みたいな。

極論言つたら、今言つてくれるように、なんか自分でこう価値観を定めてやつたらいいと思うけどね。それがめっちゃめっちゃ難しくて、年配の議員さんとかは、でも、やつぱり品位つていう言葉を使はる。品位もまあ僕も理解せんことはないんやけど、やつぱり、議會つて人の生活とか、命に関わるような決定をする場面もある。そういう時に、半袖短

パンがあかんとは言わへんけど、その景色的にね。

ザバツとした景色でやるのはどうなのかみたいな。

—こういう場、その校外の人と会つて、その相手に敬意を示す時とか、式典とかね、そういう時は正装で来ないとダメなんですけど。TPOもわきまえられるようになるうねみたいな。教育活動の一環としてあつたりするんですよ。でも、議會つてそうはいかないですよ。

—そうやね。TPOも極端に言つたら個人の価値観やしね。僕はこれで精一杯、真面目に、髪の毛を整えて、みたいな。ちよつと言ひ訳っぽいけどね、この色が僕のアイデンティティなんですとか言わはつたらね。そもそも校則つて誰が決めてんのかな。

—僕らもその校則の起源みたいなん調べたんですけど、守女の時からあんまり変わらないんですよ（立命館守山の前身である守山女子高校。だからそのルールで今までやつてたんで。本当に数ヶ月前まで、西村さんの時と大して変わらなかったと思います。さすがに時代も変わつてるし、それを自分で考えるのが「自由と清新」（建学の精神）なんじゃないかなつていうので。

難しいな。自分で決めるのは難しいよね。ちよつと話変わるけど。

最近ね、選挙権一八になったやんか。被選挙権をどうするかみたいな話をして。市議会議員が二十五からで、知事と参議院議員が三〇歳なんやけど、そもそもどんくらい引き下げたらいいかないかという話をして。ある人は判断能力がつくつていうかね、悪いこと、いいこととか、悪いこと言っちゃうとか。国の方向性とかのね、判断能力がつく年までは被選挙権を与えたらあかんちゃうとか。でも、それつて何歳なんつていう。一八歳つていう人もいれば、二〇歳つていう人もいるしね。

—その判断能力がないつていうんやつたら、一八に選挙権すんなよとか

ね。

そうそう。結局、それが政治、若者の政治参画を妨げてみたいと言ってる人もいるみたいな。なんで今この話をしたかというと、逆に中高学生で校則を変えるとか、自分で考えろってのができるのかな、できひんのかな。みたいな。その、難しいよね。どう思う？ 中学生とか。なんか、中学とはまた別やんな、校則は。

—そうです、高校だけでやってます。

中学の生徒がさ、ちよつと、高校の生徒なんかみたいに、私も自分らで考えられるしみたいな。ちよつと先生、なんでうちのことは認めてくれへんのですかって言った場合、どうなんかなあ。良い悪いとかじゃないで、もちろん。

—いや、あるんですよ。まさに。中学の場合ね、まだ高校と同じ過程を踏めてないので。中学の中でも価値観の擦り合わせがまだできてないというか。中々高校みたいに即行動に移せない体制だったりもしますしね、義務教育なので。難しいですね。

—そうやね、価値観ってね、いい意味でも悪い意味でも難しいよね。難しいな。学校ね、ほんまに難しいね。

*

市議会議員になろうとしたきっかけについて

—市議会議員にはなろうと思ったきっかけってなんですか。学校の生活とか関係あったりしてたんですか？ その、文化祭とか、生徒会長とか。

—人のためというか。マインド的な関係があったかなと思う。その、高校で生徒会長とか、文化祭とかやってて、ゼロから一のものを作ったりして、自分も心として気持ちよかったし、で、みんなも喜んでくれた

し。思うより、やってみた方がいいなみたいなね。

—なんか、やったら、まあまあできるやんってね。

—で、市議会議員になったんは、衣笠の法学部の方に進んだ時に、京都の市議会議員の人のところに、秘書みたいな感じでやって。町でいったら、生徒会長というか、実行委員長みたいな人って、市議会議員とか、市長やなと思つて。次、自分は大人になるし。で、特に僕、国会議員とか知事とか全然興味なくて。今、東京一極集中で、甲賀市にこだわるわけじゃないけど、やっぱりね、便利な地方で、みんな健康的に *well-being* とかね、健康的に暮らせる社会も選択肢として必要やなと思つて。今、このまま行ったら全部吸収されて、なんかやせ細つて、必要な時に地方が一個もないみたいな感じやったらあかんと思つてね。

—そうやって、比較的、京都、大阪と名古屋の間に地理的にはあつて、で比較的人口減少社会においても、残すべき手法とか、守るべき場所ってあると思うから、自分の町は、その一つやなと思つて。それを、じやあ守るためには、一番近いところで、町のアピールしたりとか、人口減少を食い止めたりして、残していかなあかんと思つて、なりました。

—で、マインドとしては、やっぱり、自分で思うよりも、やっていこうかなという感じ。

—あとね、会社員を三年やらせてもらってたんだけど、ちよつとね。面白かった。面白かったけど、なんかね、もうちよつとしんどかったよな、歯車感が。ほんまにあつた。あんまり人には言うてないけど。社内で頑張ったけど、やっぱり人事異動とかって、頑張り以上のタイミングとかがあめっちゃあつて、「こんだけやったのにこれか」みたいなのがあつたから、ちよつとほんまにしんどい時期があつて、そこで決断したこと

あつたから。かといって、会社員があかんっていうわけじゃないよ。もちろんね。なんか巡り巡って全部繋がった感じはありますね。

将来、学部はどこにいきたいの。

—情報理工に行つて、僕、そっち方面から社会変えたいんですよ。

両方、いはるなあ。民間だけでも、行政だけでもできひんし。

情報理工か。OIC？

—そうですね。僕はそっち方面から、なんかその、情報教育だったとか。どこからでもアクセスができるのつてすごい大事やなと思つてて。

対面のコミュニケーションも大事やけど、それ以前の問題が実際ありうるので、それは行政。僕もその、政治家一回考えたんですけど、なんていうんですか、スピード感がないというか。そりやそうじゃないですか。民主主義なんやからそうですよ。やつたら独立して会社を立てた

方がいかなつていう考えに至つて。情報を学んで、就職して経験を積んで、みたいな。

頑張ってください。でも、政治家はね、いつでも挑戦できるんよ。

なんていうか。反省点じゃないけど、つけるべき能力は若いうちにつけといった方がいいと思います。ほんまに。やっぱり力とかは、学生とか若いうちにつけておいた方がいいんじゃないかな。

—最後一個いいですか。実際、社会変える立場というか、変えられるというか。実際変えてきたじゃないですか。学校とか。そういう、物事を変えようとしてる高校生に何かメッセージがあつたらいただいていいですか。

めっちゃ普通のことなんですけど、全く恐れんではないと思います。で、ほんまに失敗するかもしれないけど、なんとかなるんですよ。うん。会社員辞めて、なんかね、めっちゃ不安な時期とかがあつたり、寝

れへん時期とかあつて、この前も選挙とか、なんか自分どうなんのかなと思つたこともあつたけど、その試練というか危機が終わつたら、ああ、ちつぽけやなつて思うことがあるんで、ほんまに恐れずに、やりた

いことをやつたらいいと思います。

恐れるなということをお伝えして、終わりたいと思います。

—ありがとうございます。

(次ページへ)



右：語り手 西村 慧さん

左：聞き手 細岡大起

【感想】

自分が携わっている文化祭の起源を知ることができ、非常に興味深かった。ゼロから一を作る仕事の難しさや、ただそれでも躓くところは似ていて、同じ文化祭を作っている立場として誇らしさ、そして改めて社会を変える人の熱意を直接学ぶことができた。規模は違えど、自分も学校の文化祭を代表してまとめている立場として、リーダーとして必要なことを学べたり、実際にどのようにして学校の中のリーダーとして学校を変えてきたのかを知れた。市民の意見を聞くリーダーと、未来の文化祭や学校についてを対話することができ、非常に参考になった。私も西村さんのような、様々な立場の人の意見を聞いて、新しい視点から解決策を考えるリーダーになれるように努力を続けていきたい。